
 書 評 ・ 紹 介

 Dimiter Philipov, Aart C. Liefbroer, and Jane E. Klobas,
 Reproductive Decision-making in a Macro-micro Perspective

Springer, 2015, 178 pp.

本書に先駆けて、本書タイトルと同名のプロジェクト「マクロとミクロの観点における出生をめぐる意思決定 (Reproductive decision-making in a macro-micro perspective, RIPRO)」が2009～2011年に欧州委員会のもとで行われており、本書はその成果をまとめたものである。欧州において長く続く低出生力状態を理解するために、出生意図の形成とその実現という側面に焦点を当て、それをマクロ (例えば低い出生力状況と様々な制度) とミクロ (例えば出生意欲に影響する個人の状況や子どもを望むも持てないというギャップ) の側面、そしてその関係という視点で分析がされている。

1章では、ミクロレベルである個人の意思決定が、個人と個人が埋め込まれているマクロレベルとどのように関連するか、という本書全体を通じた視点が解説される。社会学者 Coleman によるマクロ-ミクロモデルや社会心理学者 Ajzen の計画的行動理論 (the Theory of Planned Behavior) が本プロジェクトの支柱であることがわかる。2章は各国の歴史、政策の違いによる子育て環境の違いが説明される。家族政策は金銭的支援 (手当)、時間に関わる支援 (休業制度)、サービスの提供 (保育園整備) を中心に展開され、ここ数十年で OECD 諸国における育休制度や保育サービスは全体的に強化された。ただし各国の優先度や支援対象には濃淡がある。3章では、子を持つという意思決定に何が影響するのかを問う。文脈だけでは決まらず、個人が帰結に対して想定していること、社会規範といった周囲の期待、子育てにおける自己統制感に依存するという。4章では、短期的出生意図の実現、とりわけ延期や断念といった結果に関連する要素を、オランダ、スイス、ハンガリー、ブルガリアのパネルデータを用いて検討している。年齢 (高齢)、パリティ (無子あるいは2子以上)、配偶関係 (離婚) といった社会人口学的条件が普遍的に意図の非実現に寄与することが確かめられた。

5章では、出生意図そのものの意味に着目し、意図に伴う不確実性や可変性、測定の課題などを議論している。子を持つ人生は当たり前といった近代の見方ではなく、子は人生を充実させるといったポスト近代の見方を持つと出生意図が断念されやすいなど、価値観の重要性が指摘される。6章ではマクロ要因のミクロの意思決定への影響を議論するために、個人の出生関連規範意識に、個人が所属する社会の「第二の人口転換」度合いがどう関与するか、を2000年代半ばの欧州25カ国についてマルチレベルモデルを用いて分析している。第二の人口転換が進んだ社会では、他者に寛容な態度が進み、そのことが、意図的な無子に対する許容を後押ししていることが示唆されている。7章では編者 Philipov らによって本書が総括される。政策的関心は出生の帰結ではなく、意図と意図の実現のギャップに寄せられるべきであり、本書がその理解に役立つと述べる。

本書は、出生に関わるマクロとミクロの側面とその関係という、出生力研究開始当初から重要だと認識され議論されつつも適切なモデル化が難しい領域にあえて挑んだ点で評価できる。そして出生に関する意図の形成とその実現までの過程を丁寧に論じた点は、政策の有効性および採られるべき手法に関する今後の議論を一步進めるであろう。個人の出産意図には不確実性が含まれ、しかも重層的であること、社会心理学的方法論を援用して出生意図が社会的プレッシャーや状況に対する統制可能認識に強く依存する点を明らかにした点などは、出生意欲とその実現に関する今後の研究に大いに参考になる。ただし、客観的な指標化が確立している個人属性などと異なり、主観に焦点があるこうした領域を定量的に測定するための標準的手法は開発途上と言える。さらに欧州以外の地域を含めた国際比較調査の成果や時系列分析の蓄積に期待したい。

(岩澤美帆)